

令和 2 年 7 月 9 日現在

機関番号：34302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02953

研究課題名（和文）英語対話教材開発のための相互行為プロセスの分析 - 非言語情報を中心に

研究課題名（英文）Interaction analysis for English dialogue materials development: Focusing on non-verbal information

研究代表者

谷村 緑 (Tanimura, Midori)

京都外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：00434647

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、日本人英語学習者が参加する課題達成会話データに基づき、相互行為プロセスの実態を、発話場面と関連付けて解明することである。初年度は、言語情報、ジェスチャー、共同作業域を統合的に記述するための手法を検討した。特に、状況的認知論に注目し、言語・非言語のリソースを駆使した対話者らの知識共有過程に関する文献調査を行った。次年度には、話者ごとに個別のヘッドセットマイクを用意し、四者の多人数課題達成型会話の音声収録と動画収録を行った。そして最終年度では、母語を利用できない状況での目的指向型会話で、母語の異なる英語学習者たちが英語をどのように運用し目的達成に寄与するのかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の言語学的視点から見た学術的意義は、レゴ・ブロックを使用した限定的なタスク志向の会話を分析対象とすることで、いつ、どこで情報が共有されたかというグラウンディングの成立時点を、言語情報と作業状況から特定化することができる点である。特に、母語話者同士には見られない、英語学習者に特有の特徴を示すことができる。また、高品質な課題達成会話データを構築することにより、会話研究を深化させることができる点も特筆すべき点である。パラ言語情報は、会話において重要な役割を果たしているにもかかわらず、研究が遅れている。今回の会話データの構築はこのような会話研究の不備を補完するという意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this three-year-project is to elucidate how English learners whose first languages are different interact with each other, in scenarios wherein they use English to communicate with each other. In order to do so, we examined how communicative verbal and non-verbal resources contribute to establish mutual understanding and shared knowledge. Then we developed ways to describe language, gestures, and joint work areas in an integrated manner using Elan, an annotation tool, which allows us to tag acoustic and gestural information. In the second year, to improve sound recordings, each non-native English speaker was asked to use an individual headset with microphone to record their voice, and sets of video recordings of four-person task-oriented conversation were developed. Then, in the final year, we clarified how English learners with different first languages used verbal and non-verbal resources such as gestures and intonation to achieve consensus while they do their task.

研究分野：外国語教育

キーワード：英語学習者コーパス 相互行為 非言語情報 非対称性 ポライトネス

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、英語学習者が参加する課題達成会話データにおける、相互行為プロセスの実態を、発話場面と関連付けて解明することである。第二言語習得や外国語学習に関する先行研究のうち、ジェスチャーやパラ言語情報（相槌、言いよどみ、沈黙、発話の重なり、発話開始タイミング）といった言語外の要素を考慮した相互行為に関する研究は、Tsuchiya (2013) にみられる程度で、パラ言語情報に関する研究は十分に進んでいない。また、音声研究用のコーパス構築の分野では、「日本人学生による読み上げ英語音声データベース」(音声資源コンソーシアム提供)があるが、このデータは日本人が苦手とする発音に焦点を当てているため、音素、リズム、イントネーションの発音支援を主眼とした、単語と文の読み上げデータとなっている。そのため、言い誤り、言いよどみなどは録音後に意図的に排除されている。一般的にコーパスは、調査目的に基づいて構築されるため、当該の読み上げ英語音声データベースに言いよどみなどが含まれていないのは当然のことではある。しかし、より自然に近い形での学習者の英語発話の諸相を明らかにすることも急務であることに違いはない。実際、ジェスチャーやパラ言語情報が、会話において重要な役割を持つことは認識されており、それに資する会話コーパスの整備が必要である。そのようななか、著者らのグループは既に、英語学習者ペアと英語母語話者ペアでレゴ・ブロックを用いた二者の課題達成対話コーパスを構築しており、今回の多人数課題達成会話コーパスデータ構築は、その延長線上にある。これは相互行為で重要な機能を果たす、談話要素調査のためのコーパス構築であり、今までの対話研究の不備を補完するという意味で意義がある。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、相互行為プロセスの実態を、発話場面と関連付けて解明するために、課題達成会話データを用いて、参加者らが知識共有や合意形成を行う際の様子を分析することである。本報告書では、特に、知識共有型の二者の課題達成対話を調査対象に、①ブロックを置く場所を特定する際に、対話参加者らはなにをしているか、その際にどのような情報が利用されるかについて報告する。また、②メタファー表現が母語話者と学習者にどのような場面で、どのように使用されるのかについても明らかにする。合意形成を目的とした多人数課題達成会話コーパスデータを対象にした研究では、③合意形成が難しい場面で、相互行為に強く関与するパラ言語情報（視線、沈黙、言いよどみ）がどのような役割を果たすのかに注目する。さらに、④話者が他の参加者への配慮からどのような立ち位置で発言し、それが時間の経過とともにどのように変化するかを、動作主を示す *you, we, I* の使い分けから分析する。そしてこれらの分析を通して、英語母語話者の会話の特徴や、英語学習者に特有の現象を示す。

### 3. 研究の方法

#### (1) データ収集の方法と手順



図1 参加者の席の位置  
(Tanimura & Yamaguchi 2018)

パラ言語情報の研究のため、今回、追加データとして、レゴ・ブロックを用いた多人数課題達成会話の収録を行った。具体的には、発話の重なりや相槌、発話開始のタイミングなど、会話に特徴的な現象の分析を行うため、各話者の音声を捉えるマイク (HURE WH20XLR Dynamic Headset Microphone) と録音機器 (TASCAM US 4x4 USB Interface Audio 4 In 4 Out) を使用して収録を行った。作業場面全体を収録するため、また、発話を別々に録音するため、参加者には半円を描くように机を囲んで座ってもらい、マイクをそれぞれ装着してもらった。図1は、録画の際の様子である。

#### (2) 課題



図2 Lego Serious Play starter kits

LEGO Serious Play starter kits と呼ばれる心理学や社会学の分野で使用されるブロックを使用した (図2 参照)。ブロックの特徴は、サイズや形が様々であるために、組み合わせが不可能な場合があるという点である。また通常のブロック以外に、筒状のものや、お金(金貨)、植物、人形なども含まれている。LEGO Serious Play は、社会復帰を目指している人などに対するワークショップでも使用されており、作品を作るだけでなく、創造的な物語作成から、他者と考えを共有するといった目的がある。本データでも、参加者はブロックを積むという行為を通して創造的に作業し、作成後に作成した作品に対してストーリーを与えるという2段階の課題に英語で取り組んだ。課題は、Bjørndahl, Fusaroli, & Tylén (2015) と同様で、課題 1. responsibility (責任), 2. collaboration (協力), 3. knowledge (知識), 4. justice (正義), 5. safety (安全), 6. tolerance (忍耐) の6つである。なお、実験の前段階として、参加者らは future (未来) を表す作品を5分で作成し、その作品に対してストーリーを与えるという練習を英語で行っている。作品を作成する際はどこまでが作品かを明確にするため、A4の紙の上で作成するよう指示を出した。図3と図4は、作業後の作品の一部である(谷村, 竹内, 吉田, 仲本 2019)。こうした正解のない課題に対して、



図3 Collaboration



図4 Justice

グループで取り組みかかして創造的に課題を乗り越えていくかは、英語学習者にかぎらず、現代に生きる人すべてに必要な相互行為能力である（片岡他 2017；鈴木他 2017）。実際、本課題では、抽象的な概念を具体的な事象に落とし込み、さらにそれを英語で説明する必要があるため、積極的な言語、非言語での貢献

が求められる。

#### 4. 研究成果

##### (1) ブロックをおく位置を決定する際の課題達成実践と相互行為

本調査の目的は、レゴ・ブロックを使用した二者の課題達成対話において、指示者と作業者がブロックを置く位置を決定する際に、右と左といった直視的な空間参照枠をどのように利用しているのか、また、その際具体的にどのような手続きを経てブロックの位置を決定するのかを明らかにすることである（谷村，吉田，仲本 2020）。予測としては、一般に辞書の定義でみられる



図5 モデル

ような、互いに譲りあいながら目標に向かうといった協調的な行為を想定していた。しかし分析の結果、そのような行為とは別に、作業者、指示者が別々の行為を行いながら、指示者が気づく前には課題が達成されているといったやり方がみられた。具体的には、ブロックの配置の説明を指示者から受ける前に作業者はとりあえずブロックを置き、指示者の説明を自身の判断の正しさを確認するための情報として利用することがあった。その間、指示者は作業者の動きを観察しておらず、結果として、指示者の気づかない間に作業が完了していた。具体的な事例をみてみよう。例（1）の発話断片は、図5に示されている6つのブロックからなる形の説明部分で、指示者が1段目のブロックの配置を説明している箇所である。

(例1 とりあえず置くという行為 (G:指示者 (写真右), F:作業者 (写真左)))

- 1G: eh: ok so this time you: take a big blue one  
 <F: Gのこの発話後、左手で青のブロックを取り、机の上に置く>
- 2G: a::nd a big red one  
 <F: Gのこの発話後、左手で赤のブロックを取り右手に持ち変える>  
 <F: ブロックを青の右側に置く>
- 3G: hahaha this is so different (hh)a:nd you put the blue one on the: left hand side  
 <G: 左手で自分の左方向を指しながら説明する>  
 <F: 手は机の上に置いたまま>
- 4F: Yep
- 5G: and the red one o:n the right hand side, already done that hh  
 <F: 手は机の上に置いたまま>

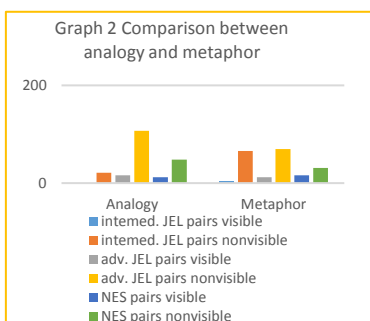
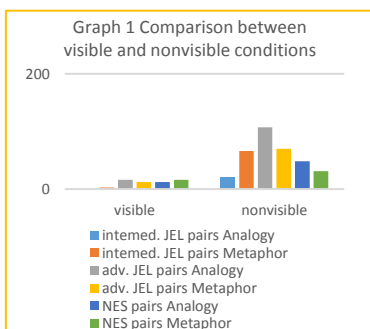


※ [ ] : 発話のオーバーラップ (数字) : 沈黙の秒数	↑ : 上昇音調
文字 : 強調	( ) : 聞き取れない発話
hhh : 笑い	<> : ジェスチャー
:	: : 声の引き延ばし

作業者は2行目で、赤のブロックの配置場所の説明を受ける前に、青のブロックの右にとりあえず置いている。当然、この時点でその判断が正しいかどうかは作業者にはわからない。にもかかわらず、置くという行為が作業者が行っているという点は非常に興味深い。次の3行目は、指示者による配置場所の説明であるが、その説明に入る前に、this is so different と述べている。これは非対面条件を10回行った直後の対面条件であるため、戸惑いを示す発話となっている。その上で、指示者は、you put the blue one on the left hand side と左手で自身の左方向を指しながら発言する。この指示者のジェスチャーは、自分を中心とした参照枠からの指さしであることから、聞き手に配慮したものではなく、自身の説明のために行っていることが分かる。言語的には、「左が青である」と言語化しているため、「右が赤である」ということが自動的に作業者に伝わっており、作業者はこの発話を自身が置いたブロックの配置が正しかったかどうかの判断材料に利用している。これは、実際、作業者がうなずいていることから裏付けられる。興味深い点は5行目である。作業者の作業が終了していることに初めて気づいた指示者が、ここで already done that (試訳：もう終わってるじゃない) と笑いながらコメントを発している。この発話断片(1)は、母語話者の言語使用において非常に興味深い示唆を与えてくれる。この二人の課題達成のための行為には、譲りあいや助け合い、情報共有、情報確認といった一般に想定されるような協調的な行為は見られない。作業者は指示者の指示を待たずにかかなり早い時点で判断し、決断を下して動作を開始し、一方の指示者は作業場面を注視することなく写真を見ながら説明している。このような情報のシェアリングは、分散認知 (Hutchins 1993) で指摘されている。Hutchins は、大型船舶のナビゲーションの方法を分析し、個々の乗組員の行為が適切に組み合わさって、現在地の特定に至っていることを発見し、活動は状況の中に埋め込まれている

ことを示した。本例では、指示者が気づいたときには、作業者の作業がすでに完了していることから、大型船舶のナビゲーションとは異なる形での課題達成実践や相互行為が行われていることが示された。

## (2) 比喩表現が使用される時の特徴



本分析の目的は、対面条件 (visible) と非対面条件 (invisible) で使用された比喩表現の頻度および種類の比較、また、学習者の英語発話における日本語の影響を明らかにすることである (Tanimura, Nakamoto, Yoshida 2019)。まず、対面条件と非対面条件における使用頻度を、英語母語話者 (NES)、上級学習者 (adv)、初級学習者 (intermed) で比較した。非対面条件での使用頻度は上級 177、中級 87、英語母語話者 79、一方、対面条件では上級 3、中級 0、英語母語話者 28 で、非対面条件の時のほうが多かった (Graph 1 参照)。これらの数値は、統計的に有意で ( $\chi^2(2, N = 30) = 20.7009, p = .000032$ )、コミュニケーションがより複雑な非対面条件で、メタファー表現の使用が増えることが統計的に示された。次に、比喩表現を分類して、分析を行った。具体的には、たとえるものが明示されている場合をアナロジー (例: It is like a stair.), 明示されていない場合をメタファー (例: Yes it is a stair.) に分類し、使用頻度を比較した。結果、上級学習者ではアナロジーの使用が多いのに対し、中級学習者ではメタファーの使用が多かった。これは、中級学習者には、類推をとまなうアナロジーでの表現が難しいことを示唆している (Graph 2 参照)。さらに、実際に使用された表現を観察したところ、学習者と英語母語話者で使用される表現が異なることが示された。英語母語話者では、アルファベットの文字 (例:T と V)、人工物 (例:a chair, a stair,

looks like a chair), 建物またはランドマーク (例: like a small pyramid, like a tower), その他 (例: a mushroom, like a totem pole) の使用が見られた。一方、学習者は、独自の表現で対応していることがあった (例: first layer (一段目) の代わりに basement (地下室))。体の一部 (例: tail (尾) の代わりに hip (おしり)) といった表現を使用していた。「ブロックのおしりのところ」といった慣習的な表現の直訳 (hip) は、日常生活の知識、文化的経験の影響を受けていることを示しており (Lakoff 1993)、生活圏を同じくする日本人同士の英語使用の場合では、コミュニケーション上のトラブルにはならず、逆に、円滑なコミュニケーションを促進するストラテジーとして機能していることが示された。

## (3) 対話への関与の仕方を示すパラ言語情報とポライトネス表現

本調査の目的は、合意形成を目的とした多人数課題達成会話コーパスデータを対象に、相互行為に強く関与するパラ言語情報 (視線、沈黙、言いよどみ) がどのような役割を果たすのか、また、沈黙からくる気まずさをどのように解消するのかを明らかにすることである (Tanimura and Yamaguchi 2018)。例 2 は、合意形成においてトラブルが生じている場面である。課題の knowledge (知識) という抽象的な語を表象する物語生成がうまくいかず、作業が一時的に中断している (図 1 参照)。言語的にも立場的にも関係が不均衡な複数の話者が関係を築くのは容易いことではなく、本グループの場合、一部の参加者 (Y と P) が中心となって物語生成を行い、残りの参加者はジェスチャーやパラ言語を用いて会話に参加している。

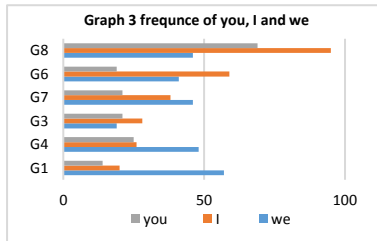
### (例 2 沈黙と逸らした視線と冗談)

- 1 P: To build knowledge, maybe, what is knowledge? Maybe we need a definition first hhh  
 2 Y: Oh yeah. [yeah]  
 3 P: [Good] luck.  
 4 P: (4) <首を反らして遠くを見つめる>  
 T: <右手をこめかみにおく>  
 5 Y: Uhm [ (6) ↑Oh OK. I think I got an idea. <右手の人差し指を上げ下げる>  
 6 P: [yeah.] <Yの顔に視線を向ける>

例 2 で、参加者の一人である P は、knowledge を適切に定義する必要があると提案し (1 行目)、good luck と冗談を言っている (3 行目)。この発話は巧みに構成されており、まず、自身の主張を押し付けないように Maybe で発話を開始し、we で参加者全員を包摂する。さらに、冗談を言うことで場を和ませている。これらは Positive politeness strategies (Brown and Levinson 1987) に相当すると考えられる。しかしながら、この提案に対する言語的な反応はなく、P は遠くを見つめ、T は右手をこめかみに置き沈黙を守る。この 4 秒の沈黙の後には、さらに 6 秒という長い沈黙 (5 行目) が続く。このような身体的動作 (遠くを見つめる、右手をこめかみに当てる) や沈黙は、合意形成上のトラブルを示していると考えられる。その後 5 行目で Y が Oh OK. I think I got an idea. とトラブルの修復を開始する。その際に、<右手の人差し指を上げ下げ

る>というジェスチャーをおこなっているが、これは考えが浮かんだことを言語以外の方法で示すもので、積極的な対話への関与と受け取ることができる。この例から、今までの議論を一旦忘れて新たに議論をするといった提案を行う際には、話者は会話参与者への配慮を示す言語行動を行うこと、沈黙は単なる無音を示すものではないこと、視線を逸らしたり、頭をかいたりといった行為は気まずさのサインになりうることなどがわかる。これは、物語生成におけるトラブルとその解消におけるプロセスには、対人関係を配慮した各話者のさまざまなかわり方があつたことを示している。

#### (4) 他者への配慮と話者の立ち位置

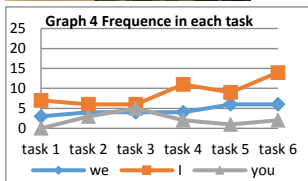


本分析の目的は、合意形成を目的とした多人数課題達成会話コーパスデータにおいて、話者が他の参与者への配慮からどのような立ち位置 (Dubois 2007) で発言し、それが時間の経過とともにどのように変化するかを、*you*, *I*, *we* の使い分けから分析することである (谷村, 吉田, 仲本 2020)。Graph 3 は、グループ別の *you*, *I*, *we* の出現頻度を示している。顕著な違いは *I* の頻度で、Group 8 では *I* の総数が 102 回と高く、一方で Group 1 の *I* の出現数は 20 回と少なかった。これは、話し手自身のスタンスを示す *I think*, *I don't know* などの使用がグループによって異なることを示している。また、*you* の使用頻度では Group 8 のみが多く、ほかのグループは 20 回前後だった。What do you think guys? What would you like? などの表現は、話し手が次話者を指定する行為であり、その場の誰かが話し手として話し出す義務を負う。したがって、Group 8 では、他のグループに比べて、話すことが義務化される回数が多かったと推察される。*We* の使用は group 3 以外は約 50 回で、Maybe we should, Maybe we can など参加者への配慮をともなつた提案がなされたことを示している。

これは、話し手自身のスタンスを示す *I think*, *I don't know* などの使用がグループによって異なることを示している。また、*you* の使用頻度では Group 8 のみが多く、ほかのグループは 20 回前後だった。What do you think guys? What would you like? などの表現は、話し手が次話者を指定する行為であり、その場の誰かが話し手として話し出す義務を負う。したがって、Group 8 では、他のグループに比べて、話すことが義務化される回数が多かったと推察される。*We* の使用は group 3 以外は約 50 回で、Maybe we should, Maybe we can など参加者への配慮をともなつた提案がなされたことを示している。



次に、「心象評価」で、関係がうまくいっているとされた Group 6 とそうでなかった Group 8 の *I*, *we*, *you* の使い方を見比べていく。まず Group 6 であるが、英語が流ちょうな F1, F2, F3 で構成されており、F1 と F2 は知り合いである。Graph 4 からわかるように、連帯感を示す *we* は安定的に使用されており、良好な関係を気付くための対人的配慮がなされていたことが示唆される。*I* の使用は徐々に増えていることから関係構築とともに話者自身のスタンスを示すことが可能になったと考えられる。実際のデータから、話者が *I* で自身のスタンスを示した際の他の参与者の応答部分に注目してみよう。



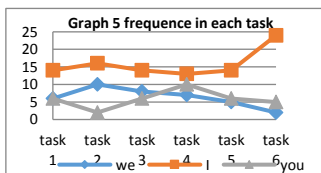
#### (例 3) 心象評価の点数が高かったグループ

- 1 F3: [ I w]ould like to, I'd like to represent (I also) the problem of the ( ) raci:sm↑,=
- 2 F2: ah yeah?
- 3 F3: =so it's, I think it's connected with tolerance;
- 4 F2: [yeah]
- 5 F3: [you ] have to be tolerance, to, tolerance with the other [people]=
- 6 F2: [uh-hm]



F3 が *I* を使用して自身のスタンスを示したあとに、F2 が同調していることがわかる。このことから、スタンスを表明しやすい環境にあったことがわかる。一方の Group 8 は、英語が流ちょうな F1, M1 と発話量の少ない F2, M2 の 4 人で構成されている。M1 と M2 は面識があるが、ほかの参与者は初対面である。Graph 5 と違って、本グループでは、相手への配慮を示す *we* の使用も、次話者を指定する *you* の使用も減る一方で、話者自身を指す *I* によるスタンスの提示が増えていることがわかる。例をみてみよう。

#### (例 4) 心象評価の点数が低かったグループ



- 1 M1: I will tolerate something.(mumbling) I: cannot, do this thing, to=where it should not=be, a:nd (2) we're out of tires.
- 2 M2: tolerate.

- 3 M1: °ah: you got `em°
- 4 F1: oh: yeah, I'm not using that
- 5 M1: OH really? thank=you
- 6 F1: `cause I don't know what to make.(2) mh:::
- 7 M1: you can make whatever: that's: the=beauty: of=this: Asymmetric. another toleranc:e. I=have to=ma:ke.(3)

例 4 の *I* で始まる発話の後続発話に、共感を示す応答や発話を発展させるような応答はない。maybe といったヘッジ表現を利用した発話もない。その代わりに *I will* のような強い意志を示す表現が見られ、合意が困難であったことが示唆される。これらの例 3, 4 は、動作主を表す語や応答部分が、グループを特徴づける要素の一つとして機能していることを示している。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 谷村 緑、吉田 悦子	4. 巻 12
2. 論文標題 課題達成対話における日本人英語学習者の基盤過形成とジェスチャーの同期	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本語用論学会第19回大会論文集	6. 最初と最後の頁 271-274
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Midori Tanimura, Masataka Yamaguchi	4. 巻 4
2. 論文標題 Politeness and Consensus Building Strategies in a Task-based Corpus of English Learners	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Proceedings of the 4th Asia Pacific Corpus Linguistics Conference	6. 最初と最後の頁 415-422
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 吉田 悦子	4. 巻 13
2. 論文標題 学習者と母語話者の共同行為（joint action）：課題達成場面における共通基盤化	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語用論学会第20回大会論文集	6. 最初と最後の頁 295-298
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 谷村 緑、仲本 康一郎、吉田 悦子	4. 巻 41
2. 論文標題 課題達成対話における談話構造の違い 目的を表す「ように」と「so that」を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会言語科学会第41回大会	6. 最初と最後の頁 186-189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷村 緑、竹内 和広、吉田 悦子、仲本 康一郎	4. 巻 119 (114)
2. 論文標題 レゴを使った目的指向の多人数・異文化会話コーパスの構築	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 信学技報（電子情報通信学会技術研究報告）	6. 最初と最後の頁 37-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷村 緑、吉田 悦子、仲本 康一郎	4. 巻 43
2. 論文標題 課題達成対話における協働行為とinclusive “we” 英語を母語とする教師と英語学習者の非対称性に注目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会言語科学会第43回大会	6. 最初と最後の頁 142-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 谷村 緑、竹内 和広、吉田 悦子、仲本 康一郎、山口 征孝	4. 巻 119 (484)
2. 論文標題 レゴを使った目的指向の多人数・異文化会話コーパスにおけるスタンスの表明	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 信学技報（電子情報通信学会技術研究報告）	6. 最初と最後の頁 33-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷村 緑、吉田 悦子、仲本 康一郎	4. 巻 44
2. 論文標題 日英語による課題達成対話の空間参照枠 - 参与者間での言語・非言語の相互作用 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会言語科学会第44回大会	6. 最初と最後の頁 222-225
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Midori Tanimura, Koichiro Nakamoto, Etuko Yoshida
2. 発表標題 How people understand each other in interaction using figurative language: Comparing Japanese and English task-based dialogues
3. 学会等名 ELSJ International Spring Forum 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Midori Tanimura, Koichiro Nakamoto, Etsuko Yosida
2. 発表標題 How analogy and metaphor are used in interaction: Comparing visible and non-visible conditions of learners' task-based corpus
3. 学会等名 The 29th Conference proceedings of the European Second Language Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	吉田 悦子  (Yoshida Etsuko)  (00240276)	三重大学・教養教育院・教授   (14101)	
研究分担者	仲本 康一郎  (Nakamoto Koichiro)  (80528935)	山梨大学・大学院総合研究部・教授   (13501)	